

風土



一石日和

神蔵

器

灯台且白衣の天使春の海

黒^ち鯛^ぬ釣の竿一本に天の鳴り

土筆生ふ地球がまるく見える丘

「宵待草」の詩碑はいづくぞ春の逝く

牛飼の左千夫に茅花流しかな

鯉のぼり田一枚に水張られ
日輪のてのひらにあり雲雀待つ
約束のなき朝顔の種を蒔く
牡丹咲く太陽を恋ひ月を恋ひ
咲き盛る牡丹に昼の暗さあり
月光の白王獅子や恋牡丹
牡丹百咲きて一石日和かな



竹間集

同人作品



彼岸湖
浜
福恵

梅匂ふ尼寺に流離の秘仏かな
一石一字塔林中に鳥の恋
念仏の里へ新道麦青む
桜苗木の寝かされて市はじまりぬ
潮騒の間遠き日なり苗木市
かさかさど若布の乾く風の来て
岩礁に渦の生るる彼岸潮

花冷え
山田 暢子

花冷えと思ふカーテン開けながら
起き抜けはいつも無口や初ざくら
病む人が顔洗ふ音あたたか
東京に空なき日なり黄砂降る
彼方まで燕の空となりにけり
書くことの好きな遺伝子竹の秋
瞑想のはじまり枝垂桜かな

桃の花
門伝 史会

思ひ出す時が母の忌桃の花
ひなの間に雛の顔して子の眠る
最果ての海に見にゆく流水群
北国のまつりを囃す猛吹雪
吹き晴れて流水帯を船進む
丹頂の一声澄めり大雪原
鶴帰る釧路湿原斜交ひに

「淡交」以後(五十四)

野沢しの武

琴の糸

山路 紀子

東日本大震災より四か月経ち

七月十一日沙羅が花こぼし
今生れしばかりの若さ雲の峰
菩提樹は季知りて咲く震災後も
三日見ず過ぎて凌霄落花の数
青葉木菟死ぬとき禪してをるや
初蝸千空句集閉ぢて聴く
青林檎われに立志の少年期

這ひ這ひの思はぬ速さ雛の間
御目まづ塞ぎて雛納めけり
先生の育児休暇や桃の花
駄菓子屋の引戸四枚春の泥
冴返る縄文遺跡に火事の跡
寝る前の白湯一杯や西行忌
如月の湖北に紡ぐ琴の糸

卒業期

鈴木 石花

御食国

岩木 茂

寝不足の雨戸を叩く涅槃西風
天を指す枝々なべて辛夷の芽
春耕の前に買ひ足す油粕
沼廻る八千七十六歩辛夷咲く
見下して箱庭に似し町霞む
お茶の水駅見下しに卒業期
御忌近き京染の衣襪抜く

御食国若狭の麦の青むなり
京へ十里残雪深くなつてきし
太陽を背中に置いて耕せり
耳ふたつ描いて貰ひし種案山子
帰り仕度の鴨鳴いてをり流離仏
春寒や海の際まで猪の出
沖の石ふりさけみれば鳥帰る

鳥雲に

田中佐知子

集落のはじめにポスト雪解風
京へ十里雪解の村に祇園橋
丈成さず咲けり雪解の犬ふぐり
春雪の畑に靴あと獣あと
甘酒に若狭の余寒言ひ合へり
雪解や栃の大樹の注連ゆるび
雪に生れてほむらのごとし座禅草
日を弾く雪より生れし座禅草
鳥雲に突堤行けるところまで
夕永し淡海は日をうちのべて

山河集

同人作品



神蔵器選

晩年の始まりにみて牡丹雪 十并 三乙

雪虫や村の外れに水の神
雪虫這ふ己の青き影の上

チューリップうしろを通る英会話
泣かずとも涙の出でて三月尽

畦焼いて長き一本峽を断つ 生田恵美子

父母に足掛けて黄砂の墓拭ふ
投函ののちの四五日寒もどる

紅型の長き袂や春うれひ
永き日の漏刻門を潜りけり

二月尽一本の指に後遺症 根岸善行

水音に段差生まれて温みけり
安芸国一の宮居を鳥帰る

林檎畑その奥の山剪定す
絡み合ふいのちを解く菊根分

陽炎の伸びちぢみする牛の尻 本間羊山

大粒の星が近づくと雪解村
三陸の山連れたちて笑ひけり

ぶらんこに乗れば記憶の空ばかり
ひらがなのあふるる朝や入学す

退官の机上整理や鳥帰る 森屋慶墓

スコップを洗ひて納屋に彼岸過ぎ
見送れとばかり賑やか鳥帰る

一行に退職辞令さくら咲く
杖に出て母の散歩や斑雪山

◇特別作品◇(抄)

いわきの春

森高 武

西行の訪ひし岩城や春の海
ぶらぶらといわき七浜日永かな
冴返る大震災の日の港
すみれ咲く津波に消えし家の跡
壊れたる船の乾きてかげろへり
堤防の絵の魚泳ぐ彼岸かな
囀りや雀の家も流されし
春の波残りし家も傷つきて
海へ咲く勿来の関の山桜
母と子の花見一つのソフトクリーム

風土独語／神蔵器



永き日の漏刻門を潜りけり

生田恵美子

漏刻は水時計の一種、水を入れた器から常時定量の水を落とし、その水位の変位、変化によって、目盛が時刻を示す装置である。

掲出句は作者の沖縄旅行の所産である。沖縄は先頃の太平洋戦争末期の悲劇の島で、米軍の砲撃や地上戦で、多くの人命や貴重な文化財など焼失してしまっただが、戦後、首里城の正殿や守礼門なども再建されている。

この句は首里城の表門、有名な守礼門側ではなく、首里城の裏門の一つであるようだ。

琉球王朝は首里を首都として栄えたが、王朝となる以前から日本より大陸との交易が盛んで文化も高かったのではなからうか。戦争の被害は勿論、裏門の方まで広がっているようだが、それで草むす中に日時計、水時計は、それを推察出来たという、胸の熱くなるよい話である。

入集の九十四首西行忌

遠藤道遙子

入集九十四首は、新古今和歌集である。勿論、後鳥羽院親撰という勅撰集だが、通具・有家・定家・家隆・雅経などが撰定にあたり、これらの人びとの評価の上に、後鳥羽院の見識が加わったものである。西行の本懐察するにあまりあるが、残念なことには、この勅撰集は、すでに西行の死後のことであつた。

なお、その他、西行の和歌入集の勅撰集は、

新勅撰 一四 続後撰 一三

続古今 一〇 続拾遺 九

新後撰 一一 玉葉 五六

続千載 四 続後拾遺 三

風雅 一三 新千載 四

新拾遺 九 新後拾遺 三

新続古今 三

この他に詞花和歌集（撰者藤原顕輔）に、「よみ人知らず」として一首入集しているとのことである。

作者道遙子さんは、西行に傾倒し、よく西行を学んでいられるようで、新古今和歌集から西行入集の九十四首に注目したのは充分意義がある。西行は花を愛した。花を愛することは「生命の愛惜」であり、「いのち」そのものである。「西行はおもしろくして、しかも心も殊に深く、ありがたきできがたきかたも共にあひかねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。おぼろげの人のまねびなどすべき歌にあらず、不可説言語の上手なり」（歌学書・後鳥羽院御口伝）。

風土集



神蔵器選

野遊びの声を遠くに画架を立て 横浜 安永 圭子

絵馬掛けの絵馬二百体梅含む

三十年余万葉講座卒業す

今年また皇居の十月桜かな

小綬鶏に目覚むる朝や深呼吸

入集の九十四首 西行忌 川崎

遠藤逍遙子

三月を色で示せば萌黄色

囀や八十六を祝ぐカード

鳥帰る風紋刻む砂丘かな

どこをどうさまよひ来しか春の泥

切通し抜け禅寺の初音かな 東京

林 いづみ

さへづりや一族ねむる大やぐら

初蝶と鎌倉古道にすれ違ふ

西行を地図にてたどる臚かな

鳥帰る空につらなる嶺のかず

大いなる古巢前方後円墳 高槻 浅田 光代

うす紙を二重に三重に桜貝

御涅槃嘆きの弟子の耳大き

本均す司書の手袋木の芽風

踏まれぬる邪鬼に春光うつすらと

音を秘め「流星」「銀河」の滝凍つる 川崎

森田 節子

地吹雪や層雲峡の底あるく

丹頂鶴大空へこゑ放ちけり

流水は鳥のゆりかごたゆたへり

鳥の立つ流水沖に向きを変へ

春風に「身代はり猿」が軒にゆれ 藤沢

榎野あさ子

花の雨濡るる墳墓に手を介はせ

花いけて花のいのちをもらひけり

春雷は浅間に二つ遊びけり

花会式散華はらはら肩にあり